

俳優・松尾貴史さんが闘病した肺塞栓症

車の長時間乗車に注意

食生活の欧米化で増加傾向

俳優の松尾貴史さん（64）は2021年に新型コロナウイルスのワクチン接種後に肺塞栓（そくせん）症になり、救命処置を受けました。昨年には2回にわたって残った肺塞栓のカテーテル治療を受けたといいます。

肺塞栓症は「エコノミークラス症候群」とも呼ばれ、元サッカー日本代表の高原直泰選手も経験しています。正式には「肺血栓塞栓症」といい、肺動脈に血の塊（血栓）が詰まり、発症する病気です。

エコノミークラスだけでなく震災後の避難所生活や車中泊など、狭い場所で長時間寝泊まりを余儀なくされると、発症リスクが高くなります。今回は、肺塞栓症の原因と治療について考えます。

58歳女性Aさんは、夫の運転する乗用車に長時間乗って帰宅しました。車を降りた直後に玄関で急に息苦しくなり、意識を失い倒れました。救急車で近くの病院に搬送され、すぐに集中治療室に運ばれました。

人工呼吸器や強心剤の治療を受けながら検査すると、血液の酸素飽和度（SpO₂）が低く、心臓エコーで肺に血液を送る右心房や右心室に負担がかかっています。肺塞栓症を疑い、血液を固まりにくくする薬（抗凝固剤）を点滴しながら造影CT検査。その結果、肺動脈に血栓を認め、血栓溶解剤による治療が始まりました。翌日には呼吸状態も血圧も改善し、その後、口から飲む抗凝固剤に切り替え、2週間後に無事退院しました。薬は3カ月間内服予定です。

肺塞栓症は欧米では1000人当たり1人ほどの発症で、急性肺塞栓症で入院した人の2割近くが亡くなるといいます。日本人の頻度はこれまで低かったのですが、食生活の欧米化に伴い増加傾向で欧米に近づいています。

肺塞栓症のほとんどは足の静脈にできた血栓が何かのきっかけで飛び、肺の動脈に詰まって起こります。たとえば、狭い座席に何時間も座っている間にできた血栓が、歩き出した時に動き血流に乗って肺に飛び、発症します。

■適度な運動で予防

血栓ができやすい状態が3つあります。1つは、避難所や車中など狭い場所で身動きが制限され、足に血液がうっ滞する状態です。

2つ目は、足のけがや手術などで下肢の静脈壁が傷ついているときです。

3つ目は、血液が固まりやすくなる状態で、がんや新型コロナに感染したときがそうです。

治療は血栓をできにくくする抗凝固療法が原則で、必要に応じ、詰まった血栓を溶かす薬（血栓溶解療法）を使ったり、カテーテルなどで血栓を回収、あるいは粉碎したりします。

とはいうものの、Aさんのように酸素を吸入してもSpO₂が低く、右心房や右心室に負荷がかかる場合やショック（血圧が下がり瀕死）状態では、救命のための呼吸循環管理が最優先です。場合によってはECMO（体外式膜型人工肺）と呼ばれる簡易型人工心肺装置を一時的に使うこともあります。

血圧やSpO₂など全身状態が落ち着いていれば、まず抗凝固治療をします。1割ほどの患者さんで再発を認め、抗凝固治療は3カ月程度は続けます。抗凝固治療をしても血圧が下がり、急いで血栓を除かないといけないときは、血栓溶解療法やカテーテル治療を行います。

肺塞栓症には予防が重要です。避難所や車中泊では適度な運動や薬の内服など血栓形成のリスクに応じた適切な予防策が大切です。